

「国際友好ジュニア合唱祭」に参加して

狭山少年少女合唱団 指導者 砂田弘行

私たち「狭山少年少女合唱団」は、7月21日から24日まで中国浙江省杭州市で開催された「国際友好ジュニア合唱祭」に行きまして。成田から飛行機で3時間ほどですが、そこには古い歴史と文化の国、中国が待っていてくれました。交流大会や歓迎レセプションでは心温かく迎えてくださり、とてもうれしく感じました。

中国の子ども達やドイツの子ども達と言葉は通じなくても、一緒に同じ歌を歌ってきました。ベートーベン作曲の「歓びの歌」です。中国語やドイツ語、日本語が混ざってとても楽しく歌うことができました。



3日目には、西湖やお茶工場、絹織物センターなどを見学し、心に残る楽しい演奏旅行となりました。ありがとうございました。

豆知識シリーズ（その11） 専門用語を一口で解説！

これで私も国際人？ ～ 一夜漬けで覚えられる「箏（こと）」の知識（その1）～

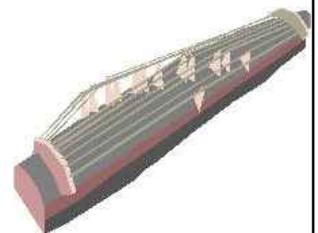
1. 歴史

箏は、今から2,500年以上前に中国で作られ、雅楽の合奏楽器のひとつとして奈良時代初期、日本に入ってきました。その後長い間、貴族か高僧しか使用できませんでした。

16世紀中頃、僧「賢順（けんじゅん）」が雅楽から独立した箏の音楽を始め、17世紀「八橋検校（やつはしけんぎょう）」が新しい箏のジャンルを確立、代表的なものに「六段の調べ」があります。

室町時代の頃、平家琵琶を語る盲目の琵琶法師たちが職業ギルドを作って自分たちだけの治外法権的社会を組織し、幕府もこれを認めていました。

江戸幕府もこれを引き継ぎ、盲人の生活を保護する意味から、あんま・針・灸・地歌・箏曲（そうきょく）といった職業を盲人の専有としました。職屋敷は強い制度に縛られ、最も位の高い盲人として検校（以下別当・勾頭・座頭）頂点は総検校と呼ばれ絶



対的な権力を持っていました。八橋は総検校であったため、彼ら独自の音楽を発達させ、今日の箏曲の母体を作りました。

後に生田検校の生田（いくた）流と、当時はやった江戸の浄瑠璃を取り入れた山田検校の山田（やまだ）流の2大流派が生まれ今日に伝わっています。

20世紀に入ってから、洋楽の要素を取り入れた新しい試みがなされ、生田流の「宮城道雄（みやぎみちお）」山田流の「中能島欣一（なかのしまきんいち）」の二人が、特に大きな功績をあげ、それに続く優れた作曲家・演奏家が輩出されました。師弟制度を中心に多くの人々に広がり、加えて邦楽を専門に教える大学や、NHK邦楽技能者育成会などが、沢山の邦楽演奏家を世に送り出しております。（「楽器」の紹介以下は次号につづく）

（狭山市三曲連盟 横山美衣）